

沖繩語の表記をめぐる問題点

(沖繩語の文を文字通り読むと、なぜ沖繩語にならないか)

これまでの沖繩語の文を学習者が読むと、沖繩語にはなりません。その原因は、読み手が文字通り読む教育を受けていて、それに慣れきっていることと、その一方で書き手が旧仮名遣いや歴史的仮名遣いなどの言文不一致の書法で書いているためです。そのため書いた人が読めば沖繩語なのに、学習者が読むと沖繩語にならないというズレが出るのです。例えば学習者は「ないさめ」を正しく読めません。「ねさみ」と言文一致にして現代仮名遣いで書けば、読みの迷いはなくなり、問題は解決します。

(書法の原則は一音一字)

日本語で読み書きされる「しゃ、ちゃ」など、日本語と同じ音は日本語と同じ書き方でよいのですが、沖繩語固有の音を、日本語の仮名を二字三字組み合わせて書き表すのは学習者には適しません。これまでは「ない」「や」「つくわ」を一音で読ませるなど、著しい言文不一致となっています。また、目下向け二人称を「ついやー」と書いてあるのを見かけます。「っ」などを小書きして「ついやー」、「ついやー」、「ついやー」などもあり、皆同じ音のつもりで書いています。学習者は小書きがあっても文字通り「ついやー」と読みます。こういう事情は学習者を混乱させるばかりです。この種の音は沖繩文字を使って、原則一音一字とするのが学習者に最善で、問題は解決します。「ついやー」は「やー」で済みます。

(あ、ゑの音)

沖繩語の「縁」(エ)に「ん」とルビを振っている例を見かけますが、この書き方は旧仮名遣いです。「ゐ」をこのように用いるのは、局所的には凌げても他の文字と不釣合いになります。「上」の(ウ)は一字でどう書くのでしょうか。既存文字一字では書きようがなく、また二字の組み合わせによって「うい」、「うい」などと書く外はなく、前述のように一音二字になって合理的ではありません。更に、現在のパソコンのキーボードの統一規格では「ゐ」を「wi」と打って出します。このことから、「縁」(エ)を「ん」と書くのは違和感があり、文字体系にそぐいません。現代仮名遣いでは「ゐ」は「wi」であるべきです。「酔い」は「ゐー」、「縁」は「いん」、「上」は「ゐー」と書く、他の音ともよく整合します。また、「ゑ」は不破裂音の「we」です。先賢の山内盛彬もこのように使っています。これに対する不破裂音の「we」は「^ゐwe」と書く、他の音と整合します。例えば、「^{ゐん}ちゆ(鼠)」、「^ゐわじゃゑー(災い)」のように書けば、瞭然に解決します。

(県条例と沖繩語の地位)

沖繩語を含めて沖繩各地の伝統言語を一括し、方言と呼ばないで「しまくとぅば」と呼んでこれを復興し、次世代に引き継いでいくことが、二〇〇六(平成十八)年沖繩県の条例として定められました。これまで標準語(共通語)の異形と思われるきた沖繩語等が、県条例によって方言とは呼ばず、地方の正当な言語として公認されたことは画期的なことです。本研究は、県条例の趣旨に沿い、沖繩語を標準語の下に置くのではなく、一つのまとまった言語系であるとの認識のもとに進めたものです。しかしなお、県条例の趣旨の普及が十分でないため、沖繩語を標準語の下で考える人が多く、このことは沖繩語の教育表記の上で大きな障害となっています。